

3月のコラム「夢であって欲しいと、今でも願い続けてしまうのです」

社会福祉法人りとるらいいふ  
理事長 片桐公彦

3月11日14時46分。僕はその時、某児童クラブで定期会議を行っていました。なんとなく大きく横に揺れたあと、強い揺れを全身に感じました。テレビをつけると宮城・岩手で大きな揺れ。映しだされた数字を見て、息を、飲む。“**マグニチュード7.7**”

震災を何度か経験している者からすると、この数字がどれほどの規模なのかを想像することは容易でした。1995年に起きた阪神大震災がM7.3。それを超える規模です。児童クラブのスタッフの方々はテレビを見つめながら、対策を口々に話し始めました。僕もすぐに現場の支援が入っていたので、その場で会議は解散となりました。信号待ちの携帯電話で情報を取ります。地震の震度を示すマグニチュードの値はみるみる上がって行きました。電話は通じない。僕は焦りました。

宮城県と岩手県の海岸沿いで大きな津波が襲いかかったと知ったのは、支援を終えて事務所に戻った後でした。信じられない映像が次々と映し出されました。その夜は時折やってくる余震に怯えながら過ごしました。そして早朝4時頃の大きな地震。ひょっとしたら津波がくるかもしれないと思い、妻と二人で車に乗り込んで走らせました。そして落ち着きを取り戻したところで「りとるの家」に行きました。ウインターキャンプのために妙高で前泊していたスタッフを呼び戻しました。上越市役所に行くと、朝5時の時点で多くの方が対応に追われていました。僕は一言二言、無事を確認し合い、支援の段取りを簡単に打ち合わせました。7時には妙高にいたスタッフ、ボランティアさんたちは「りとるの家」に戻り、ボランティアさんたちはその場で解散になりました。その時間には、りとるらいいふのスタッフの多くも集まっており、休

日のスタッフにも連絡を入れ、何かあったら来て欲しい、申し訳ないが自宅待機でお願いしたいと告げました。その時点で電話が非常につながりにくくなっていたので、連絡用にりとるらいいふのツイッターを立ち上げて発信しました。これまでの経験から電話回線は死んでもインターネットは生きていることを知っていたからです。それは今回も同じでした。

その後、揺れの強さは最終的に「マグニチュード9.0」になりました。

それからの記憶は、実におぼろげです。自分がいつ、どこで、何をして、誰に何を言ったのかの記憶が曖昧です。覚えているのは、節電と言われながらも地震速報がいつでも受け取れるようにつけっ放しにしていたテレビの映像。眠りながら「死者・行方不明者が…」 「原発が…」と聞こえてくるアナウンス。ヘリコプターの音。誰かが悲しそうに叫ぶ声。それらの残像がこびりついて見る奇妙な夢。

そしてこの原稿を書いている今、僕は全国の仲間たちと連絡を取り合い、支援が必要なおとくに物資を運ぶ段取りをし、人的支援のコーディネートを引き受けています。この一週間は激動でした。自分が通常引き受けている仕事のいくつかは投げ出しています。たぶん、ご迷惑をおかけするのだと思いますし、実際にかけていると思います。申し訳ありません。相変わらず、多くの出来事が記憶に残りません。この2週間の出来事が夢であって欲しいと願って眠りにつきます。でも、それが夢じゃないことは、地震が起きてから見続ける奇妙な夢の数々がこれは現実起きたことなのだと教えてくれます。

まだ気持ちは前向きになれません。流れ続ける公共CMを眺めながら、この出来事が夢であって欲しいと、今でも願い続けてしまうのです。